アナトリア諸語における中性名詞 -sa/-za 語尾の形成について

大　城　光　正

岡山理科大学教養部

（昭和58年9月20日　受理）

I. はじめに

アナトリア諸語の名詞格語尾の比較研究における難解な問題として，象形文字ルウィ語（以下，Hier. Luw.）の中性 N-A. sg. -sa/-za の語尾が挙げられる。同語尾は他のアナトリア諸語の無語尾形，-n 語尾形，又は，-(a)t/d 語尾形[1]が印欧語（I-E.）との対応を示唆しているのと較著な相違を提示している。特に，-za 形は，従来，-i（i の長音）と見做されてきたものであるが，最近の Hawkins, Morpurgo-Davies, Neumann (*HHL*)[2]による Hier. Luw. 文字の音価修正によって，-za 表記として思考されるに至った。同修正は上述例のみならず，a>i，ā>ia，i>zi，sa>si，na>ni 等の如く，Hier. Luw. 文字音価全体に渡っており，Hier. Luw. 研究の根本的な見直しを迫るものである。そこで，この小論では，*HHL* によって指摘された観点から，Hier. Luw. -sa/-za 語尾を中心にして，他のアナトリア諸語においても散見される -sa/-za 要素を例示することによって，アナトリア諸語の -sa/-za 語尾の形成を考察してみたい。

II. Hier. Luw. -sa/-za 語尾について

Hier. Luw. -za 語尾形は，中性 N-A. sg. 語尾として明確に規定出来る。

① atama-za 「name」 (<*ataman-za)

N-A. pl. 形として，á-ta$_5$-ma-ni (Boyb. IV(3)[3]. ataman-i, -i＝N-A. pl. n. 語尾）が認知され，同語の -n 語幹名詞が措定される。Hier. Luw. では，子音の前に位置する -n- 音は決して表記されないことから，同形は *ataman＋za>atama(n)za が推察される。更に，次の語も -n 語幹名詞に -za 語尾の付加した N-A. sg. 形を示唆している。[4]

② DOMUS-na-za 「house」 (*parnan-za)[5]

③ (CASTRUM) harnisa-za 「fortress」 (*harnisan-za)

④ (LOQUI) pá＋ra/i-ta$_4$-za 「word」 (*parat(t)an-za)

(cf. N-A. pl. n, : p]á＋ra/i-ta$_4$. Karkemiš A. 27)

本来，中性 -n 語幹名詞の N-A. sg. 形は無語尾形であり，上記例は無語尾形への -za 語尾付加による有語尾化傾向を示唆している。更に，Hier. Luw. の -za 語尾保有は，名詞

以外に，代名詞や形容詞の N-A. sg. n. の格語尾としても認められる。

⑤ ama-za atama-za 「my name」 (*amanza atamanza)

⑥ Á-*TANA*-wá/í-za(URBS) "TERRA"+X(-)wá/í+ra/i-za 「Adanawan land」

⑦ á-ma-za$_4$ DOMINUS-ní-za DOMUS-na-za 「my lordal house」

⑧ CAPUT-ti-ia-za á-ta$_4$-ma-za 「manly name」

⑨ sà-ma-za CAPERE-ma-za 「sealed document」

⑩ á-pa-sa-za sa-na-wa/i-ia-za 「that good(one)」

⑪ REL-à-za 「関係代名詞 N-A. sg. n.」 (*hwanza)[6]

上記例の代名詞，形容詞の格語尾変化は，-za 語尾に関する重要な徴証を示唆している。すなわち，Hier. Luw. 所有代名詞 ama-za，指示代名詞 apasa-za，関係代名詞 REL-à-za は，本来，ami- (cf. N. sg. comm. á-mi-sa 等)，apasi- (cf. N. sg. comm. á-pa-si-sa 等)，REL-i- (cf. N. sg. comm. REL-i-sa 等) の如く，-i 語幹を有しており，中性 N-A. sg. 形はそれぞれ，*ami-an-za>ama(n)za, *apasi-an-za>apasa(n)za, *REL-i-an-za>REL-a(n)-za の如く，-a- 語幹化の推移が思考される。又，受動分詞形の sà-ma-za も *sami-an-za (cf. Hit. šai-「press」，ルウィ語受動分詞 -mi-) から作られている可能性が考えられる。Hier. Luw. に見出せる -an- は，楔形文字ルウィ語（以下，Cun, Luw.）の中性 N-A. sg. -an 語尾に照応しており，-i 語幹を -a 語幹化する機能を有している(Cun. Luw. *kišammi-an>kišamman ; *atupalašši-an>atupalaššan 等)。[7] 故に，-n 語幹以外の Hier. Luw. の中性 N-A. sg. 形は，-an- 語尾に，更に，-za 語尾が付加されたものと推知される。そこで，Hier. Luw. -za 語尾形には，本来の中性 -n 語幹名詞（無語尾形）に付加した形と，-i 語幹に中性 N-A. sg. -an 語尾（-i>-a 語幹化）と -za 語尾の重複的な付加によるものに類別されるが，個々の例においては，-n- が明示されないために，両群を明確に分析，分類することは不可能である。

⑫ à+ra/i-ma-za 「(a kind of monument)」

⑬ CAPERE-ma-za 「document」 (cf. Cun. Luw. lalami-. comm.)

⑭ SCRIBA+*RA/I*(-)wa/i-ma-za 「？」

上記の 3 例は，受動分詞 *-mi-an-za の可能性が示唆されるが，詳細は不明である。

⑮ (BIBERE/VINUM) sarlata-za 「offering」 (cf. 動詞 sarla-, Cun. Luw. šarlatt(a)-)

⑯ VIA-wa/i-ta-za 「road」 (cf. VIA-wa/i-na. A. sg. comm.)

⑰ (THRONUS) istarta-za 「throne」

⑱ (*382) salaha-za 「power」

⑲ (SIGILLUM) sasa-za 「seal」 (受動分詞 sami-, cf. Hit. šai- 「press」)

⑳ (STELE) tasa-za 「inscription」

㉑ (VINUM) tuwarsa-za 「vineyard」

㉒ LOCUS-ta$_4$-za 「place」 (cf. Hit. pedan)

㉓ TERRA-wá/í+ra/i-za 「land」

㉔ EXERCITUS-lá-za 「army」

Dat. sg. EXERCITUS-lá-ni (-i=Dat. sg. 語尾) より，同語は -n 語幹が思考される。

更に，Hier. Luw. において，N-A. sg. n. -za 語尾以外に，明らかに -sa 語尾を有する語が見出せる。

㉕ REX-hi-sa 「kingdom」

同語は *REX-hi(t)-sa であり，抽象名詞形成辞 -hit (語末の -t は省略)[8] と -sa 語尾に分析可能である。Hier. Luw. -hit は Cun. Luw. -hit に対応する (ex. N-A. sg. huitwalahi(t)「生命」, Dat: huitwalahiti, Inst: huiduwalahitati 等)[9]。Hier. Luw. -sa は -t 消失後の語末 -i に直接付加していると思われる。

㉖ (STATUA) taru-sa 「image, figure」

Hier. Luw. STATUA-ru-ti-i (A. l. a. (5)) を Meriggi は STATUA-ru- に Abl. sg. -ti 語尾の付加形と考え，名詞 -u 語幹に分類した[10]が，*HHL* や Mittelberger の指摘の如く，同語は STATUA-rut- に Dat. sg. -i 語尾の付加形であり，-t 語幹名詞に類別すべきである。[11] 故に，上記語は *taru(t)-sa>tarusa (語末 -t 消失後に -sa の付加) の形成が推察される。これは例 ㉕ REX-hi(t)-sa- の形成に類するものである。又，tarusa は Cun. Luw. [d]arušša, ALAM-ša の対応語と思考される。

㉗ tara/i-sa 「image. figure (?)」

同語は 例 26. (STATUA) tarusa の異形の可能性が示唆される。

㉘ VIS-há-sá 「power」

上記語は，Karatepe LII: OMNIS+*MI*-ma-za VIS-há-sá「every power」(異形：OMNIS+*MI*-za) の如く，N-A. sg. n を示唆しており，-sa 語尾の可能性が考えられる。

以上のことから，次に，-sa/-za 語尾間の相違分布が問題となるが，これに関する有力な証拠としては，Cun. Luw. の音変化と Cun. Luw. の名詞に認められる-ša要素の類似性が挙げられる。すなわち，Laroche の指摘の如く，-n (又は -l) の後方に付加される -*s は -z に変化する (cf. Cun. Luw. 名詞格語尾 -nzi, -nza (<*-ns-) 等) という観点[12]から，Hier. Luw. -za 語尾 (-n 語幹と -an の後方付加形) は直前の -n 音のために *-n-s(a)>-(n)-za 変化の結果と思考される。しかし，母音に直接付加した -sa 要素は例 25－28 の如く，本来の -sa を保持している。しかも，同要素は Cun. Luw. -ša 要素 (詳細は後述) との対応を示唆している (ex. Hier. Luw. REX-hi-sa (<*REX-hi(t)-sa) : Cuw. Luw. huitwalahi(t)ša 等)。そこで，Hier. Luw. -sa/-za 語尾の形成は次の 3 通りに類別される：

(1) -n 語幹名詞 (本来，N-A. sg. n. 無語尾形) に -sa の付加形：*-an+sa>-a(n)-za

(2) -i 語幹に中性 N-A. sg. 語尾 -an と -sa の重複的な付加形：-*i+an+sa>(a 語幹

化）-a(n)-za

(3) 母音語幹（本来，中性母音語幹，又は，中性子音語幹の子音消失による母音語幹化）に直接 -sa の付加形：－*母音＋sa＞－母音-sa：-sa の保持

上述の如く，Hier. Luw. -sa/-za 形は，本来の中性 N-A. sg. 無語尾形，又は，-an 語尾形への -sa 要素による画一的な有語尾化を暗示している。但し，上述の分類に含まれない例外的な -za 要素が認められる。

㉙ (STELE) wani-za 「stele」 (cf. Cun. Luw. wanniš Nom. sg. comm.)

同語の -za 形は，本来 -sa として現われるべきもの（上述分類(3)）である。しかし，同義語に中性名詞 N-A. sg. (STELE) tasa-za が在り，上記語は Cun. Luw. の対応語（共通性名詞）の如く，本来，共通性名詞であったものが，類推（(STELE) tasa-za/(STELE) wani-za）によって，中性化 -za 語尾付加したものと思考される。しかも，本来の -sa 形ではなく，-za 形による付加は，Hier. Luw. における中性 N-A. sg. 語尾として -za が固定化していたことを暗示させる。

㉚ (MENSA) wasi-za 「table」 (cf. Cun. Luw. ^{GIŠ}waššiš N. sg. comm.)

上記語も例 ㉙ wani- と同様に，共通性名詞であったことが思考される。Hier. Luw. (THRONUS) istarta-za (指示詞 THRONUS と MENSA は同じ文字＝Laroche Nr. 294) との指示詞の一致により類推的に，-za 語尾による中性化が考えられる。上述の例外的な 2 例は，関連語からの類推作用による共通性から中性名詞化をおこしたものであるが，本来の -sa ではなく，改新形 -za の付加による中性化は，同形が Hier. Luw. 格語尾体系に組み込まれていたことを示唆している。

III. Cun. Luw. -ša 語尾について

Cun. Luw. には，Laroche の "cas" en -ša という呼称によって規定される一群の -ša 語尾を有する中性名詞が存在する。Laroche は同形を前接所有代名詞 (enclitic possessive pronoun) N-A. sg./pl. (cf. Hit. -šet/-šit) と推定するに至った。[13] 但し，*HHL* の指摘の如く，同要素がすべて明確な名詞を指示する代名詞として確証されるとはかぎらず，むしろ，同要素は格語尾の一種と理解すべきものと思考される。それは同要素が N-A. sg. 形として推知される箇所に見出せることから想像される。[14]

まず，Cun. Luw. -ša は抽象名詞形成辞 -hi(t) に付加した形 -hi(t)-ša として認知される (cf. Hier. Luw. REX-hi-sa)。

① aš-ru-la-hi-ša 「？」

② at-ra-hi-ša 「？」

③ ha-an-ta-wa-ta-hi-ša 「command」

Lyc. yñtawata ; Cun. Luw. 異性：ha-an-da-wa-te-en (handawati- の A.sg.comm.)

④ hu-u-it-wa-la-a-hi-ša 「life」 (cf. Hit. huišwatar)

⑤ i-ú-na-(a)-hi-ša 「？」

⑥ ma-aš-ha-(a)-hi-ša 「？」

異形：ma-aš-ha-re-eš-ša (A.sg.n. !)

⑦ u-wa-ra-an-na-hi-ša 「？」

⑧ zi-da-a-hi-ša 「virility」 (cf. ziti-「man」)

上掲例の如く，-ša の付加は，語末 -t 消失後に行なわれたもの (-*hi(t)+ša>-hi-ša) である (cf. N-A. sg.: huitwalahiša (-hi(t)-ša=-ša の付加); Dat. sg.: huitwalahiti (-hit-i=Dat. 語尾 -i の付加); Abl.: huitwalahitati (-hit-ati=Abl. 語尾 -ati の付加)。すなわち，本来の N-A. sg. 形は語末 -t 消失の規則に従って，-hi で終る無語尾形であったと思われるが，同語形に -ša 要素の介入があったことを示唆している。

⑨ ha-a-ra-tar-ša 「offense」 (cf. Hit. haratar: -r/n 語幹中性名詞)

異形：haratnanti- (-nt- 語幹の共通性名詞)

⑩ hu-i-du-mar-ša 「life」 (cf. Pal. huitumarša !)

⑪ ú-tar-ša 「matter, thing」 (cf. Hit. uttar: -r/n 語幹中性名詞)

異性：ú-tar. 同語は直接的に Hit. uttar に対応する。上記語 utarša は Cun. Luw. -ša 要素付加による改新を暗示させる。utar/utarša は文脈上，意味的な相違は存在しない。[15]

⑫ u-wa-at-tar-ša 「(utarša の異形？)」

上掲例⑨－⑫においては，I-E. の古期的特徴である -r/n 語幹中性名詞 (N-A. sg. -r で終る無語尾形) への -ša 要素による有語尾化の改新が示唆される。アナトリア諸語の中で，-r/n 語幹を保持するのは，Hit. のみであり，他言語においては諸々の改新が考えられ，Cun. Luw. -ša による N-A. sg. の有語尾化もその一つと思考される：Cun. Luw. kuppešša: Hit. kuppeššar/-šnaš; Cun. Luw. happešša: Hit. happeššar/-šnaš 等; Cun. Luw. haratnanti-: Hit. haratar (Cun. Luw. -nt- 語幹共通性化); Cun. Luw. kattawatnalli-: Hit. kattawatar (Cun. Luw. -alli 形成辞による共通性化) 等。[16]

⑬ [d]a-a-ru-ša, ALAM-ša 「image, figure」 (cf. Hier. Luw. tarusa「image, figure」)

Cun. Luw. daruša は Hier. Luw. tarusa の確証より，-t 語幹中性名詞が推察される (*daru(t)-ša>daruša)。

更に，Cun. Luw. には Hier. Luw. と同様に，-za 形が見出せるが，これは -l (又は，-n) の後方に位置する場合に，-*sa>-za 変化をおこしたものである (音的には -*š>-z)。

⑭ pu-wa-ti-il-za 「past」 (cf. 異形，pu-ú-wa-ti-il：無語尾形)

⑮ pár-šu-ul-za 「broken piece (?)」 (cf. Hit. paršulli !)

⑯ a-ad-du-wa-al-za 「ill(ness)」 (異形，a-ad-du-wa-a-al (無語尾形)，cf. Hier. Luw. MALUS-za)

上掲語は大半が adduwal-za utar-ša「bad thing」の形で認知される。形容詞 N-A. sg. n. 形として認められる対応の一致は Hier. Luw. の場合と類似している。

⑰ ^{GIŠ}kat-ta-lu-uz-[zi]-ša 「threshold」 (cf. Hit. kattaluzzi)

-uzzi は道具等を主に示す接尾辞であり，非印欧語のフッリー起源が有力であるが，[17] 詳細は不明。

⑱ ha-la-li-iš-ša 「purity, pure」 (異形，ha-la-a-al)

上記例⑰－⑱は母音 -i 語幹に直接 -ša 語尾が付加した形である。

結論的に Cun. Luw. -ša 語尾の形成を体系的にまとめてみると次の如くである：

(1) －母音＋ša＞－母音 -ša (本来の中性子音語幹が子音消失によって母音語幹化したものも含む)

(2) 中性 -r 語幹 (無語尾形)＋ša＞-r-ša

(3) -l 語幹 (無語尾形)＋ša＞-l-za (-š＞z の変化)

但し，Cun. Luw. の -ša 語尾形は Hier. -sa/-za 形のように固定化していたのではなく，本来の無語尾形も在証され，両語尾形が混用されている：無語尾形：hirun(t)「oath」; kallar「damage」(Cun. Luw./Hit. ?); kukupalatar「?」(Hit. ?); malli(t)「honey」; pahur(-)「fire」(Hit. ?); taparu「gift(?)」; tatariyaman「curse」; zamman「?」(異形 za-am-ma-an-za (-za/-*sa 語尾 ?)) 等。特に，明瞭に Cun. Luw. 語彙と言える hirun(t), malli(t), taparu, tatariyaman は Cun. Luw. の中で使用頻度の高い主要語彙であり，これらの語は本来の無語尾形を強固に保持している。

IV. パラー語の -ša/-za 語尾について

一般に，パラー語 (以下，Pal.) においても，Cun. Luw. と同様に，-ša/-za 要素の存在が思考される。[18]

① huitumarša 「life (?)」 (cf. Cun. Luw. huidumarša)

Pal. の証拠は，KBo. XIX. 155, 13': [hu-i] -tu-mar-ša […… の如く，明瞭ではないが，Carruba の指摘によって，Cun. Luw. huidumarša に対応することが思考され，Pal. -ša 語尾の保持が暗示される。[19]

② ma-a-ar-za 「?」 (Pal. における -*r-ša＞-r-za を示唆)

③ ma-a-ah-la-an-za 「?」 (cf. Hit. ^{GIŠ}mahla-「grape vine」)

④ šu-wa-a(-)ša-la-a-an-za 「?」

上掲 3 例は次の箇所に認められる：

KUB. XXXI. I8. I, 16':]-an-za ma-a-ar-za ma-a-ah-la-an-za a-an-ti-en-ta ma-a [-ar--ha-aš] 7'[a]-ta-a-an-ti ni-ip-pa-ši mu-ša-a-an-ti a-hu-wa-an-ti ni-ip-pa-aš ha-ša-an-ti

Kammenhuber[20] は，mārza, mahlanza 共に，N. sg. comm. であり，動詞 a-an-ti-en-ta (Prt. pl. 3) の主語と考えている。Meriggi は，mahlanza を Cun. Luw. 化した語 (Luwism: Cun. Luw. A. pl. comm. -anza 語尾に一致)，marza を Pal. 特有の -*r-ša＞-r-za 変化による plural tantum -*ša 要素の付加形 (cf. Cun. Luw. -*l, -n＋ša＞-l, -n

+za）と解する。[21] 同指摘は Carruba によって補強され，これらの語は ata-「eat」，ahuwa-「drink」の目的語となっているように思考されている。[22] そこで，Pal. の -ša/-za 要素は Cun. Luw. の影響を受けた一種の Luwism の結果と想像されるが，例は僅少である。

V. Hit. -ša/-za 語尾について

Hit. -ša/-za 語尾に関しては，例が僅少であり，詳細は不明であるが，*HHL* において，2 例の同要素の指摘が在る。[23]

① šu-um-ma-an-za 「rope, cord」（cf. Gr. *ὑμήν*）

② (Glossenkeil) ku-wa-ya-am-ma-an-za 「?」

šummanza は語源的根拠から同語を šumman-（-n 語幹名詞）と -za（<*-ša）に分析出来るものと思考されているが，Hit. 文書では，šummanza (N. sg. comm.)，šummanzan (A. sg. comm.) の如く，共通性を示しており，Oettinger の指摘の如く，šummanza は -n 語幹に N. sg. comm. -š 語尾（<*séwh$_1$-mōn+s）の付加による特異形と思われる。[24] 又，ku-wa-ya-am-ma-an-za は mehur「time」(N-A. sg) と共に使用されており，中性 N-A. sg. Luwism による -mi- 分詞に -*an-sa>-an-za の付加形が示唆された。[25] しかし，同語が Glossenkeil の用語であり，明白に Hit. 語彙として解することは困難に思われる。すなわち，現存する Hit. 文書においては，-ša/-za 語尾の明白な在証は認められないようである。

VI. -sa/-za 語尾の起源について

以上の如く，アナトリア諸語に散見される -sa/-za 要素は言語間で較著な相違を示している。Pal. Hit. に推知される同要素は Cun. Luw. からの影響を髣髴させるものであり，Pal. や Hit. 語彙として措定されるべきではないと思われる。-sa/-za 語尾の形成は Hier. Luw. と Cun. Luw. に明著な徴条である。Hier. Luw. の -sa/-za 語尾は N-A. sg. n. の有語尾として固定化しているのに対して，Cun. Luw. の同語尾は無語尾形との混用が認知されており，又，名詞以外の普及は若干の形容詞（ex. adduwal-za utar-sa 等）に認められるのみである。Cun. Luw. の様相は，ルウィ諸語の最古層の言語ゆえに，同要素の萌芽から過渡的な混用状態を暗示している。

従来，-sa/-za 要素の形成に関しては，前出の Laroche の説を含め，諸種の見解が提示されているが確証されるに至っていない。Starke[26] は，同要素を Cun. Luw. 中性 N-A. pl. -a 語尾と -s 語幹（中性）の分別上の誤謬による付随的 -s (ein sekundäres s：本来，-s 語幹の語末 s) からの形成と解している。しかも，Cun. Luw. の後期において，-ša 語尾は N-A. pl. n. -a 語尾よりも優勢になる傾向を示唆している（cf. GESTUG-$^{III.A}$-ša：後期 ^{UZU}GESTUG-za)。故に，Starke は Cun. Luw. の -ša 語尾は N-A. sg. ではなく，N-A,

pl. 語尾であり，Cun. Luw. 中性 N-A. sg. 語尾は僅少ながらも -n と無語尾しか存在しないと主張している。又，彼は Hier. Luw. -sa/-za 語尾については，本来の N-A. sg. -n 語尾に副次的 -sa 要素（拡張子）が付加したもので，Hier. Luw. 資料に明白な中性 N-A. sg. 語形は存在していないことを示唆している。しかし，彼の例示した Cun. Luw. 属格形容詞 -assi- の箇所は Laroche の指摘[27]の如く，-aššа (N-A -pl.)/-aššanza の例外的な照応を示しており，又，中性名詞の N-A. sg./pl. の区分の不明瞭さや，Hier. Luw. N-A. sg. *-an 語尾に N-A. pl. -sa 拡張子の付加による中性 N-A. sg. の改新の不自然さは十分に解釈されているとは思われない。又，Carruba[28]はアナトリア諸語に認められる -sa 語形を感情的原因（auf emotionalen Ursachen）に基づいており，無生的中性から活性的中性を作り出す機能（macht "unbelebte" Neutra zu "belebten" Begriffen）を有するものと思考している。しかしながら，上掲例の如く，N-A. sg. -sa/-za 語尾は Hier. Luw. において，名詞のみならず，形容詞，代名詞にも見られ，Cun. Luw. においても，形容詞，名詞に本来の無語尾形（例は僅少）との混用が認められる。Carruba の指摘による unbelebte Neutra/belebte Neutra（又は，casus affectivus）の対立も文脈上明確な類別は不可能に思われる。又，彼の-sa起源の主張（<*I-E. -*so als "aktivierendes", appositionelles Affix）も十分に確証されるものではない。更に，Arbeitman[29]はアナトリア諸語の内的考察ではなく，印欧語の比較考察から "-za" (!) 語尾を究明しようとしている。彼は Skt. r/n 語幹の N-A. sg. -t 語尾（yákr̥t/yaknás, śákr̥t/śaknás）や Gr. r/n 語幹に類する r/t 交替（ἡπαρ/ἧπατος 等）の -t 要素に着目して，Skt. Gr. -t 要素とルウィ語 -za (!) (cf. Skt. tad; Gr. τό: Cun. Luw., Hier. Luw. za-) を対応させている。しかし，同要素は決して -za 形ではなく，-*sa（又は -*s）に帰せられるべきものである。更に，楔形文字や象形文字の音節表記の不明瞭さを考慮に入れるならば，起源的に -*s 要素が抽出されるであろう。-sa の中の母音 a の表記は音節文字の表記上の導出と考えるべきであろう。この -*s の形成は Arbeitman の指示した Skt. Gr. の -t 拡張子導入と同様の過程を示唆しているように思われる。

VII. おわりに

そこで，諸種の徴証を手掛りにして，-sa/-za 要素の形成についてまとめるならば，以下の如くである：

-sa/-za 要素は Starke の反論にもかかわらず，Otten, Laroche, Carruba 等の見解の如く，単数形に属し，又，同要素は上述の如く，中性 N-A. 明示の格語尾要素と思考される。更に，同要素は起源的に -*sa ではなく，-*s 拡張子（-l, -n の後方 -*s>-z）に帰せられるものと思われる。-*s 拡張子の N-A. sg. への介入は，Arbeitman,[30] Oettinger[31]の指摘の如く，Skt. 又は，Gr. 中性 N-A. sg. 無語尾形に散見される -t 拡張子の導入によって暗示されている。Hier. Luw. や Cun. Luw. における -*s 要素の拡大は，アナトリア祖語から

分岐したルウィ祖語（Pre-Luwian）において萌芽的発達が考えられる。Cun. Luw. は両語尾形（本来の無語尾形と -sa 改新形）の混用による過渡的様相を呈し，Hier. Luw. は従来の語尾の完全な排除と，-sa/-za 語尾としての定着化が示唆される。同要素の中性 N-A. sg. 語尾としての導入は，他のすべての格語尾が有語尾であるために，N-A. sg. n. 無語尾形を有語尾化して統一的な格体系を作ろうとする平準化（leveling）の作用が働いているように思われる。これは，Hit. の中性 N-A. sg. 無語尾形が共通性語尾によって有語尾化（性も共通性化）した[32]のと対照的な傾向を示唆している。

注

1) 名詞の語尾 N- A. sg. n. Pal, -at, Lyd, -d を有する。中性 N- A. sg. -(a)t/d 要素はアナトリア諸語の前接代名詞や指示代名詞の中に認知される：Hit. Pal, 前接代名詞 -at, 指示代名詞 apāt 等; Pal. 指示代名詞 kāt; Cun. Luw., Hier. Luw. 前接代名詞 -ata; Lyd. 前接代名詞 -ad; Lyc. 同 -ede 等。
2) J. D. Hawkins, A. Morpurgo -Davies, G. Neumann, *Hittite Hieroglyphs and Luwian : New evidence for the connection* (Göttingen, 1974) 以下 *HHL* と略す。象形文字表記は同指示に従い，Ideogram はラテン表記，他の音節文字表記は Hawkins の一連の研究成果に従う; cf *An. St.* 25 (1975) pp. 153-155; *KZ* 92 (1978); *Florelegium Anatolicum* (Paris, 1979); *Studia Mediterranea* (Pavia, 1979) 等。
3) 象形文字ルウィ語文書の表記は，E. Laroche, *Les hiéroglyphes hittites* (Paris, 1960) に従う。
4) *HHL* p. 31 ; p. 34.
5) pl. DOMUS -na (-a=N-A. pl. n. 語尾) : Hit. pir/parn-, Cun. Luw. parna-, Lyc. prñnawa-, Lyd. bira-. Hier. Luw. の同語は，*parnan-za と *parn-za の可能性がある (cf. *HHL* p. 34)。
6) 関係代名詞 REL-à-za (*hwanza) について，*HHL* p. 34 ; 拙稿，The Relatives in Hieroglyphic Luwian, *ORIENT*, 19 (Tokyo, 1983. 印刷中)。
7) *HHL* pp. 33-34; H. Mitteiberger, Zur Schreibung und Lautung des Hieroglyphenhethitischn, *Die Sprache* X (Wien, 1964) pp. 50-98; 同上，Das Neue Bild der Hethitischen Hieroglyphen, *Grazer Beiträge*, 7 (Graz, 1978) pp. 1-14; E. Laroche, *Dictionnaire de la langue Louvite* (Paris, 1959) p. 137 (以下，*DLL* と略す)。
8) *DLL* p. 132, p. 139.
9) 上掲箇所; *DLL* p. 47.
10) P. Meriggi, *Hierolyphisch-Hethitisches Glossar* (Wiesbaden, 1962) p. 176.
11) *HHL* p. 32; Mittelberger, 前掲論文 pp. 10-11.
12) *DLL* p. 133; Hit に関しては H. Eichner, Hethitisch gĕnuššuš, ginušši, ginuššin, *Hethitisch und Indogermanisch* (Innsbruck, 1979) p. 58 (54) ; N. Oettinger, Die n-Stämme des Hethitischen und ihre indogermanischen Ausgangspunkte, *KZ* 94 (1980) p. 45.
13) *DLL* に見出せる -ša を有する語彙参照のこと; E. Laroche, *RHA* XXIII/76 (1965) p. 44 ; *BSL*, 55 (1960) p. 167; A. Kammenhuber, *HbOr* (1969) p. 290.
14) *HHL* p. 33; O. Carruba, Der Kasus auf -sa des Luwischen, *Gs. für H. Kronasser* (Wiesbaden, 1982) pp. 1-15.
15) Carruba, 上掲論文 p. 12 : útar "Wort, Ding, Sache" : útar-sa "(das) Wort (ist) er (der/den)" 同相違は明白ではなく，variant にすぎない。
16) *DLL* p. 140; 拙稿，ヒッタイト語における中性名詞の衰退について『オリエント』24/1 (東京，

1981) pp. 1-12.

17) H. Kronasser, *Etymologie der Hethitischen Sprache* (Wiesbaden, 1966) pp. 240-241.

18) O. Carruba, *Das Palaische Texte, Grammatik, Lexikon*, StBoT10 (Wiesbaden, 1970) 同書では中性 N-A. pl. としており，単数形に類別していない。

19) KBo XIII. 260. III. 18 : hu-i-du-mar-ša u-up-pa-an-na-an-du 「they may bring…」 cf. *HHL* p. 33 (118).

20) A. Kammenhuber, Das Palaische : Texte und Wortschatz, *RHA* XVII/64 (1959) pp. 46-47 : 訳 "Die m. essen, sättigen sich aber nicht ; sie trinken werden aber nicht satt."

21) P. Meriggi, Anatolische Satzpartikeln, *RHA* XXI/72 (1963) pp. 6-7.

22) O. Carruba, 前掲書 Lexikon の項参照。

23) *HHL* pp. 33-34 (121)

24) Oettinger, 前掲論文 pp. 44-63.

25) *HHL* p. 176 (121); kuwayammanza mehhur "periodo d'angoscia" Stefanini, *Rendiconti Acc. Lincei* 20 (1965) p. 55.

26) F. Starke, Die Kasusendungen der luwischen Sprachen, *Fs. G. Neumann* (Innsbruck, 1982) pp. 407-425, esp. pp. 417-419.

27) *DLL* IGI-za, GIG-za, GEŠTUG-ša-za の項参照のこと。

28) Carruba, 前掲論文 pp. 1-15.

29) Y. Arbeitman, Cuneiform and Hieroglyphic Luwian -za, *KZ* 90 (1976) 145-148.

30) 上掲論文。

31) N. Oettinger, Die Dentalerweiterung von n-Stämmen und Heteroklitika im Griechischen, Anatolischen und Altindischen, *Fs. G. Neumann* (Innsbruck, 1982) pp, 233-245.

32) 拙稿，前掲論文 pp. 1-12.

The formation of -sa/-za neuter ending in Anatolian

Terumasa OSHIRO

Department of General Education,
Okayama University of Science,
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, JAPAN

(Received September 20, 1983)

It is obvious that the N-A. sg. neuter in Hier. Luw. ends either in -sa or in -za, as considered by Hawkins, Morpurgo-Davies and Neumann in *HHL*. This peculiar ending in Hier. Luw. is not an isolated formation, but it seems very probable that it is parallel to the -sa case of Cun. Luw. nouns, which has long since been identified by Laroche in *DDL*. He has stated later, however, that this form may be an enclitic possessive pronoun of N-A. sg./pl. neuter. But there seems to be no reason to follow his result, as pointed out in *HHL*. Further, we can cite a few examples of -sa/-za element in Palaic and in Hittite respectively, but it is quite impossible to decide whether their evidence will be clearly parallel to the above-mentioned -sa element in Luwian languages. It should be noted that -sa formation is considered as one of various innovated characteristics in Luwian languages. Especially Cun. Luw. seems to denote an earlier phase of -sa linguistic innovation, since we can indicate the contaminated usage of both an original zero-ending and a -sa new ending. On the other hand, -sa element in Hier. Luw. is surely understood as the N-A. sg. neuter ending of nouns, pronouns and adjectives. The vowel -a in -sa is essentially interpreted as a supplementary element in the writing system of Hieroglyphic or Cuneiform syllabograms. Thus -*s element is surely assumed as an innovated enlargement of the N-A. sg. neuter. It should be noted that the extension of the element -*s in Luwian may be indicated as parallel with -*t enlargement in Skr. or Gr. neuter nouns. Accordingly, the ground for this observed fact might be regarded as an analogical function of "leveling", which denotes the process tending to complete the standardized system of the "marked" declension.